

保育参加ウィーク「三勝二敗」

入江 礼子

一学期も終盤に近づいた六月末の一週間「保育参加ウィーク」と銘打って、今年から兼任している幼稚園で保護者に保育に参加して頂いた。午前中の二時間半、保育に入ってもらい、その後、園長、副園長と共にその日の保育のこと、子どもたちのこと、幼稚園の方針等について話し合う。そして最後の日の

午後、今度はクラス懇談会で担任とも話し合いの場を持つという企画である。今の幼稚園のありのままを見てもらうことで、保護者と幼稚園が共通の話題を持つ。そのうえで共に子どもたちを育てていきたいという願いがあつてのことであつた。

「保育のありのままをみてもらう」ということは簡

単なようで実は難しい。特にこの園の場合は私が引き継ぐまでの保育を支えていた保育観と私自身の保育観にかなりの開きがあったので、この保育参加ウィークを実施するにあたってはかなりの勇気がいった。その上に、この園で既に一、二年間を過ごしてきた保護者の方のとまどいと反発が予想されたからである。

「三十年前の幼稚園にタイムスリップした」それがこの園に入つての私の率直な印象だった。九時までに登園、そして整列をしての体操、週に一回は園長の話と続き、それが終わるとクラスに入り、朝の集まり。その後はクラスごとの活動。二時の降園まで、一斉活動の合間にしか子どもたちは園庭で遊んでいなかった。幼稚園の中に足を踏み入れて気付いたことは、保育室の前に固定遊具が並んでいることだった。それ以上先の園庭には出るなという子どもたちへの無言の圧力のように私には感じられた。こ

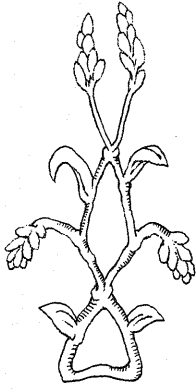
の園の評判は「園児のお行儀がよく、きちんとしていゝ」「しつけに厳しい」というものであり、保護者もその方針に賛同して入園を決める方が何人もいゝ。そういうことは分かっていたが、だからこそ「なんとか子どもたちが園庭で遊ぶ園にしたい」という思いを副園長のNさんと共に強く持った。

この思いを実現すべく、園の先生方と話し合つた。三、四、五歳児をあわせても六十人という小規模園で担任は四人（二十代前半から三十代前半）、主任は一人（五十代）という構成である。そこに園長、副園長という形で併設大学の教員である私たちが入つた。

主任は他園の保育の経験者で、子ども主体の保育の体験もある。しかし担任はすべて新任のときからこの園で保育をしており、他園の経験はない。もともとボトムアップというよりはトップダウンの風土のなかで、ここ二十年以上は先程述べた保育の形態

が続いているので、教師は保育の中に子どもの主体的な遊びを中心にした時間というものがあるということを知ったことはあっても実際には見たこともないわけである。そんな状況ではあったが、今年からは午前保育の時でも四十五分から一時間位、通常保育のときはせめて十時半くらいまでは、子どもたちの主体的な遊びを中心にした時間にして欲しいとお願いした。

「きつとの方が子どもたちのことがよく見えてくるから！」と半ば強制的ではあったが、私達の方針を伝えたわけである。このとき教師の方から反論はなかった（トッブダウンの風土のためか……）。子



どもの主体的な遊びを中心とした時間を充実させるためには教師の環境構成や準備、配慮が欠かせない上に、それぞれに遊び込む子どもたちに対する指導となると教師の力量がかなりでないと放任という落とし穴にはまってしまふ。そこに落ちないためにも、私も含めた教師の力量ということでは一時間半が限度だとも考えた。

それともう一つ、保護者の問題があった。先程述べたように、この園には園に「しつけ」を求めたり「規律」を求めて子どもたちを入園させている親も少なからずいるわけである。その親たちが、この「子どもたちが主体的な遊びをする時間をとる」ということに対してどのように反応してくるかは火をみるよりも明らかだった。

今回のもう一つの大きな変更点は「マジックミラー」を使った親の観察日を廃止するというものである。この園の各保育室には「マジックミラー」

ム」がついている。幼児教育の研究に使うためではなく、保護者が子どもに見られないようにそこに入って、幼稚園での子どもの姿を見て頂くために使っていたようだ。保護者には魅力的な「子どもに見つからずに子どもの姿をみる」ということが子どもの人権にもかかわることと考えたからである。

四月に保育が始まったとき、今年からの保育の変更点として特に前記二点を説明し、このような変更はあっても、「子どもたちを大切に育てたい」という思いは変わらないという旨を説明した。その時点で特に五歳児の親たちから「きちんとしているから入園させたのに！ それでは約束違反です！」等のブーイングが出た。私たちは「子どもたち一人一人が主体的に遊んでいるところから子どもたちの個性も今まで以上に教師にもわかり、それが細やかな保育姿勢となって、設定保育の場面でも生かすことができるのです」というような言い方で昨年度と変わ

らない部分があるということを伝えた。

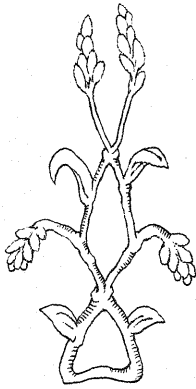
しかし「今年から園の方針が変わる」「マジックミラーで子どもの姿をみることも出来なくなるらしい」ということになる保護者の目には「かわった」部分しか映らなくなっていく。四月後半に開いたクラス懇談会はかなりの緊張感をもったものになった。そのときを経て、ともかく教師たちとは園内研修等の保育についての話し合いを恒常的にすること、また保護者とは極力話し合いの機会を持つということで月に三度ほど、園長、副園長と話す会を始めた。

保護者にとって一番気になるのはやはり幼稚園での子どもの姿。話し合いの度に保護者からは子どもたちの姿をみたいという声が上がった。私たちとしては、本当は園を保護者に開放するのはもう少し保育の質が上がってからにしたいというのが本音であったが、発想を切り替えて「ありのままを見て

らって話し合ってみよう」ということで「保育参加ウィーク」を実施することにした。

保護者には「参加でも参観でも、どんなスタイルでもいいですから、幼稚園に遊びに来てください」と伝えた。一週間のうちの都合の良い一日に来て頂くことにしたところ一日あたり十名前後の保護者が訪れた。この一週間は梅雨の中休みとなり毎日毎日三十度を越えるような蒸し暑さとなった。そんななか、すっかり遊び仕度をしてくる保護者と参観のみと心に決めてくる保護者に大きく二分されての保育参観ウィークとなった。

「三勝二敗」とは保育参加後の話し合いで、今まで



の二ヶ月間の保育をとりあえず肯定するような発言が多く出された日と否定的発言の多かった日の割合である。話し合いは年長、年中、年少の区別なく参加された方で時間の許される方全員に私たちが参加するかたちで行われた。

肯定的意見の多くは、「体を動かして参加」された保護者から挙がった。「子どもと一緒に体を動かしてみても、あれだけドッジボールにこだわっている娘の気持ちが変わりました」「子どもが毎日毎日泥団子を作ってくるので私もやってみたのですが、これって修行がいるんですね。一日で出来ることではないことがよくわかりました。それに子どもたちがこの土を使ったらよいかをよく知っているのにびっくり」「お母さん、遊びたいなら入れてあげてもいいよと言われ、ああ、ここは子どもの国なのだと思います。もっとお母さんって来てくれるかと思っていたのに……」「子どもって一生懸命なんで

すね。こういう姿は観察室からはわからなかった」
「遊ぶようになってお弁当をよく食べるようになって嬉しいです」「毎日毎日寝る前に明日は幼稚園で〇〇をするんだ！と言って眠るようになったんです」等々。

また子どもとは遊ばずに立って見ていた保護者からは「やっぱり、去年よりお行儀が悪くなっていますね。まえに逆戻りしたみたい」「みんなそろって朝の挨拶もしないで遊び始めちゃうんですね。メリハリがなさ過ぎますよね」「年長でこんなに遊んでいたんでは小学校入学が思いやられます。せめてそういうことをもう少し意識して欲しいです」「遊ばせすぎだと思えます。娘は決まって水曜日になると疲れて目の下に隈を作ってしまうんです。お願いですから、もっと遊ぶ時間を短くしてください！」。

あととはどちらの保護者からも「先生の働きかけが弱いのではないか。もう少しかわると子どもたち

がもっと楽しく過
ごせると思います
よ」「お部屋のな
かがなんだかがら
んとしてお部屋に

いる子どもたちもいるのだけれど、なんだか手持ちぶさただったみたい。先生方もみんな外に出払っているの、私、一緒に遊びました」等々、今の私たちの保育で抜けたり、欠けたりしているところを鋭く突く意見も出された。

私たちは八十パーセント聞き役にまわっていたが、「ここは元に戻して欲しい」という意見が出るのと、「それはこういう理由でできない」という説明を余儀なくされる面も多々あった。ときにはその白熱した場を持ちこたえるのがやっとなという日もあった。

そして迎えたクラス懇談会。年少組では子どもた



ちの成長は認めるものの担任に対してもう少ししっかり子どもたちをみてほしいという意見が出された。年中組は四月と比べて、子どもたちの成長が読みとれて嬉しかったという意見が多く、和やかに進行した。年長組は四月は保護者対担任という形の懇談会になり担任は苦しい思いをしたので今回も緊張して臨んだのだが、保護者対担任というより、保護者同士がお互いの意見を出し合って白熱した。

保育参加ウィークは緊張の連続ではあったが、何とか持ちこたえたことで、一番の収穫だったことは、保護者たちが自分の意見をお互いの前ではっきりと発言するようになったことだと思う。そこがよいと思っただけで入れた園の保育方針が変わってしまうという大きな転換のとき、私たち園側にその非難の矛先は向けられて当然であろう。しかしともかく語らい、話し合いのときを多く持つことで今までは「この園でのよいことは一つ。それ以外はいけないこ

と」という発想だった保護者が「いろいろあっていい。それを言い合っている」という状況になってきたことは私たちが当初予想だにできなかった大きな収穫だった。

保護者の真剣な目に映った私たちの至らなさ。その指摘を真摯に受け止めて少しずつ保育の力量をあげていなくては……。今は保育の方針で白熱しているが、これが落ち着いて、保護者が保育の内容に厳しい目を向け始めたら「三勝二敗」すらおぼつかないのだから。

(鎌倉女子大学)